

# 慶應義塾中国文学会第七回大会要項

開催日 2022年7月2日(土)

※ZOOMによる開催

## 慶應義塾中国文学会第七回大会日程次第

13:00 ZOOM 開場

総合司会：浅野 雅樹（慶應義塾大学文学部教授）

13:30～13:40 会長挨拶 関根 謙（慶應義塾中国文学会会長）

研究発表

13:40～14:10 文学と歴史の対話——話劇『曙光』を中心として

崔 靖宜（慶應義塾大学大学院文学研究科中国文学専攻後期博士課程）

司会：杉野 元子（慶應義塾大学文学部教授）

14:10～14:40 元和・長慶期における元白の詩観の相違について

席 暢（慶應義塾大学大学院文学研究科中国文学専攻後期博士課程）

司会：須山 哲治（慶應義塾大学文学部准教授）

14:40～15:10 毛宗崗本『三国志演義』の人物評価——蜀の人物を中心に——

鵜浦 恵（慶應義塾大学経済学部専任講師）

司会：山下 一夫（慶應義塾大学理工学部教授）

（休憩）

講演

15:20～16:00 現代日本の長編小説における「三国志」の受容について

——吉川英治・柴田錬三郎・陳舜臣・北方謙三・三好徹・宮城谷昌光——

吉永 壮介（慶應義塾大学文学部教授）

司会：高橋 智（慶應義塾大学文学部教授）

16:00～17:00 被拔高的作家和被贬低的史书

陳 正宏（復旦大学古籍整理研究所教授）

司会：高橋 智（慶應義塾大学文学部教授）

総会

17:00～17:30

## 研究発表要旨

### 文学と歴史の対話——話劇『曙光』を中心として

崔 靖宜（サイ セイギ）慶應義塾大学大学院文学研究科中国文学専攻後期博士課程

作家白樺は映画『苦恋』の脚本を書き、監督したことによって、1981年に鄧小平政権主導の激しい批判運動の的にされた。『苦恋』をめぐる中国国内外では様々な論考が発表されたが、白樺の他の作品はほとんど検討の対象とされていなかった。本発表が取り上げる作品『曙光』は、1976年に話劇脚本として創作され、その後1979年に映画化された、白樺の代表作の一つである。本発表は、話劇『曙光』に焦点を当て、まず、脚本の創作背景、上演に至るまでの経緯などを考察する。さらに、話劇『曙光』の脚本が二回ほど大きく改変されたことに注目し、脚本の改変問題について検討を加えたい。最後に、『曙光』の脚本を1930年代に湘鄂西ソビエト区で起きた「改組派」への粛清事件という歴史的事実と照らし合わせていく。1970年代末、共産党の歴史に対する白樺の認識は政府側の解釈と概ね一致するが、その後に展開された党史研究との間に齟齬が生じたとみられる。この問題も合わせて考察し、話劇『曙光』の白樺文学における立ち位置を確認する。

キーワード：白樺 当代文学 話劇

### 元和・長慶期における元白の詩観の相違について

席 暢（セキ チョウ）慶應義塾大学大学院文学研究科中国文学専攻後期博士課程

中唐時期に、政治や社会の裏では様々な暗闇が存在し、一部の文人たちはその深刻さに気づき、政治の改革だけでなく、文学の改革も必要だと述べ、文学特に詩に対する考えは盛唐時期と異なってきて、詩はどうあるべきかという問題を深く思考されるようになった。その元和・長慶期に活躍した詩人としては、白居易と元稹が最も名高い。二人は新楽府を唱え、『詩経』や楽府の精神に立ち返るべきだと主張している。彼らの詩観については、先行研究は山ほどあるが、しかしほとんどは白居易と元稹を別々に論じているもので、或いは一緒に論じていても二人の詩観は同じであるという結論になっている。実際に、同じような詩風を有しながらも、同じく新楽府を唱えながらも、詩論に関しては若干異なるところがある。それについては詳しく考察を及ぼす必要があると考えている。唐の時代には、長い時期にわたって議論されてきた詩の政治性、社会性を重視する「言志」説と詩の感情、辞藻を重視する「縁情」説は中唐時期になっても相変わらず共存し、二項対立している。言うまでもなく、その時期の詩論は「言志」説に偏っているが、「縁情」説の影も多少見られる。本稿は「言志」説と「縁情」説に基づき、先行研究に踏まえ、元白をめぐる元和・長慶期の詩観に関して考察を行う。

キーワード：白居易 元稹 詩観 言志 縁情

### 毛宗崗本『三国志演義』の人物評価——蜀の人物を中心に——

鵜浦 恵（ウノウラ メグミ）慶應義塾大学経済学部専任講師

『三国志演義』は明代に成立して以降、数多くの版元から出版され様々なバージョンが存在するが、その中で通行本としての地位を確立した毛宗崗本は、既存の版本に比べて人物像に一貫性を持たせたり、蜀漢への忠義をより尊重したりといった特徴を持つことが既に指摘されている。その姿勢はいわゆる脇役と呼ばれるような人物描写においても徹底されており、同じ主君に仕える者でもその立場や人間関係によって緻密に表現が書き分けられている。例えば劉璋に仕えていながら劉備に蜀を献上することを画策した張松、法正、孟達は、その後の行動によって毛宗崗の評価が分かれており、それに呼応するように本文が改変されている箇所が見られる。

本発表では、『三国志演義』に登場する様々な人物のうち、劉備や孔明に仕える人物に焦点を当て、底本とされている李卓吾本と比較し毛宗崗本において意図的と考えられる改変が加えられている点を指摘し、改変が行われた背景やその効果について考察を試みる。

キーワード：三国志演義、毛宗崗本、蜀